

日刊動労千葉

79.7.17

No. 74

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
電話 二五八九(公巻品室) 二七二〇七

「オルグ」の惨状 失望喪失

七月一日から展望も内容もなく再開されている「本部オルグ」なるものは、いたる所で、末期的惨状をさらけ出している。

口をきかない「オルグ」?!
ノルマ消化でくたくた!

「オルグ」に見られる末期的惨状のその一は、地方からの参加者や年輩者に特に表われているが、全く「やる気なし」のアルバイト的動員消化型である。実例を示そう。

①七月四日、盛岡地本を軸に一二名が一〇時すぎ新小岩に来たが、詰所で一時間半ほど「休けい」し昼休みに引き上げた。そのうちの半数六名が一四時半木更津支部にまで足をのばし、ここでも自分たちだけで詰所で「休けい」をとって一五時半に引き上げた。この間、新小岩でも木更津でも誰とも一言も口もきかず、デマピラの一枚も置いていかない。職場の皆ビククリ。

②同じ日、大分地本を軸に一二名が午前・津田沼↓午後・成田と、ダブルヘッダーで通りすぎたが、その所要時間たるや何と津田沼(一〇時三五分来る↓一一時帰る)成田(一四時二七分来る↓一五時〇八分帰る)という超スピード!! もちろん話もせず、ピラも置いていかない。「わざわざ九州の方から出て来て、ありやあなんだ?」「ずい分ノルマがきついらしいな」と皆をいぶからせる。

国労への逃亡分子を美化・擁護
一日共と連合してピラはがし!

「オルグ」に見られる末期的惨状その二は、青年部を中心とした極悪暴力分子のあせりからくる衝動的破壊行為である。

七月八日、極悪暴力分子、室井・西村を先頭とする一五名の青年部が千葉運転区に侵入。彼らが大急ぎでやって逃げたことは、何と、この間支部全体でとりくんでいる石井勝重らの卑劣な国労逃亡分子を糾弾する支部掲示・ピラをはがして盗んで行ったのである。この事は、彼らの「オルグ」なるものの本質を実に卒直に示している。

彼らは、この間「国労へ行け」と「オルグ」そっちのけで、どう喝し、国労内日共と手を組んで卑劣な組織介入を誘導してまわっていたが、遂に、公然と国労内日共と石井らを擁護するためにのみ彼らは全力を上げて行動しようというのだ。「再建デマ情報第20号」に至っては、日共がデッチ上げを架空の「暴行事件」なるものまで借りてきて石井らを美化・擁護しているのみならず、権力・当局の弾圧をよびこもうと必死にデッチ上げ宣伝している事を徹底弾劾しなければならぬ!

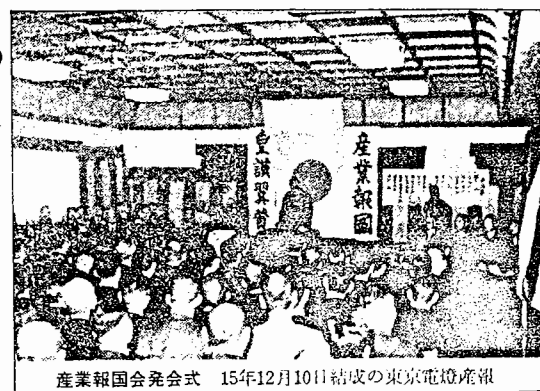
公然と開始された
動労大改革への決起!

この様な惨状を呈する一方で全国至る所で着々と「動労大改革」「造反」の火の手は上がっている。そして遂に第一〇五回臨中委の決定的事態に象徴されるように、一〇地本・一分科から本部指導路線に真向から反対する特別決議が公然と提起されるに至っている。

勝利の確信も固くいざ動労大改革へ!

産報運動と労働運動の危機 (I)

各単産の定期大会が次々と開かれている。八〇年代へ向っての展望を打ちたてるべき今年の大会であるが、出されている方針をみると「ストライキ放棄」「経営参加」「話し合い」という、労働者の実力闘争を否定し経営者の「良心」に期待する右翼的路線への転換が急速に進んでいる。



年	労働運動	産報運動
1936年	973組合(420,000人)	
40	49" (9,455人)	4,180,000人
41	11" (895人)	5,290,000人
44	0" (0人)	

「国連盟」が結成され、一九四〇年に「大日本産業報国会」、四二年に日本文学報国会、大日本言論報国会と次々と続き、隣組制度や町内会の編成利用の中で、国民のことごとくを戦争に動員する体制が作りあげられて行く。

戦前の労働運動は「産業報国会」運動(政府丸がかえの運動)によって懐滅させられていった。

戦争と激動の八〇年代を闘いぬき勝利する労働運動をつくりあげるために、「産報」への敗北の歴史から何を学ぶのか、少しふり返ってみたい。

(一) 歴史の教訓から学ぼう—産報運動の発祥

産報運動が開始されたのは一九三八年(蘆溝橋事件)中国侵略開始の前年)である。この年の十一月には「農業報